

## 遠藤周作論 : 長崎・キリシタン資料の受容を中心に

下野, 孝文

<https://hdl.handle.net/2324/4772320>

---

出版情報 : Kyushu University, 2021, 博士 (学術), 論文博士

バージョン :

権利関係 : Public access to the fulltext file is restricted for unavoidable reason (3)

氏名	下野 孝文			
論文名	遠藤周作論—長崎・キリシタン資料の受容を中心に—			
論文調査委員	主査	九州大学	教授	松本 常彦
	副査	九州大学	教授	波瀾 剛
	副査	九州大学	准教授	西野 常夫
	副査	横浜女子短期大学	元教授	兼子 盾夫
	副査	京都外国語大学	教授	長濱 拓磨

### 論文審査の結果の要旨

申請論文は、長崎を舞台にした遠藤の主要作品について、作品の構成、人物の造形、本文の記述や描写など、作品生成の過程で遠藤が参照し受容した各種の資料を特定し、受容の状況や様相を検討することで対象となる個々の作品読解を提示するのみならず、遠藤文学を貫流するキリスト教の受容と表象について、その全体像を具体的にモデル化している内容になっている。

本論文は、序章、本論（全七章）、終章から成り、主要参考文献一覧と初出一覧を付す。

序章は、各章の構成の意図を説明する。また、論文の課題設定の前提として、初期作品から長崎を舞台にした作品への移行に伴う問題群を整理・検討している。

第一章は、長崎を舞台にした最初のキリシタンもの「最後の殉教者」の主要な典拠が永井隆『乙女峠』であるとし、『日本外交文書』等の記述と対比しながら作品の志向性を析出する。その上で、この時点での長崎の設定と意義が、典拠への傾斜の強さに比例し、資料受容による所産の次元にとどまると指摘する。また『乙女峠』の影響が後年の作に及ぶことも付言している。

第二章は、「札の辻」とチスリク「江戸の大殉教」等との対比、「雲仙」と姉崎正治『切支丹迫害史中の人物事蹟』、パジェス『日本切支丹宗門史』等の対比を通じ、二作品を含む『哀歌』執筆時期における「弱さ」のモチーフに典拠の派生という要素があることを論証する。また、『哀歌』から「沈黙」への展開において、踏絵に関係する資料群の受容とその解釈の意義について考察し、遠藤文学を貫く「弱さ」の系譜の形成過程を可視化する。

第三章は、遠藤の代表作「沈黙」について、人物造形と典拠資料との関係、先行する長与善郎のキリシタンものなどの批判的摂取の様相、芥川龍之介「神神の微笑」との対比など、多面的な視点から検討し、作品の具体的読解を提示する。さらに、「沈黙」の執筆とその後の「母なる宗教」への傾斜との不可分な関係性についても指摘している。

第四章は、「沈黙」後の作品「母なるもの」を中心に、父親と母親に関する記述を対照しながら、「母」像の聖化の過程を確認する。さらに、その「母」像と「死海のほとり」や「イエスの生涯」のイエス像との相同性を指摘し、「沈黙」から「母なるもの」を経て「イエスの生涯」に至る過程を「母なる宗教」の輪郭が明瞭化する過程として捉え、その展開において、(一)弱者の系譜の深化(二)許しの系譜の構成(三)私的要素の素材化という特色を指摘している。なお、上記においても、いずれも典拠資料の指摘と検討がなされている。

第五章と第六章は、遠藤が「私の心の故郷である長崎への恩返し」と述べた「女の一生」（一部、二部）について、本山桂川『長崎風物誌』、同『長崎方言集』、浦川和三郎『浦上切支丹史』、久米邦

武関連資料、池田敏雄『長崎キリシタンの精鋭』、同『キリシタンの精鋭』、沖本常吉『乙女峠とキリシタン』(以上一部)等、小崎登明『長崎のコルベ神父』、同「長崎聖母の騎士資料集」、『夜と霧』、『聖母の熱愛者』、『ナガサキ』等原爆関係資料(以上二部)等の典拠資料を精査・特定し、その参照・受容を検討することで作品の志向性を具体的に論証する。それを通じて、第一部と第二部に通底するのは、「人、その友のために死す。これより大いなる愛はなし」(ヨハネによる福音書・第一章第一三節)の聖句であるとして、「女の一生」が、遠藤の文学的課題「日本人に合ったイエス像」の追究において、きわめて重要な作品であることを指摘している。

第七章は、第六章までの作品史的展開は、「日本人に合った基督教、イエス像」という遠藤の課題追究の展開と呼応し、その背景に遠藤におけるトマス・アクィナスへの距離感とアウグスティヌスへの傾斜があったと指摘する。具体的には、両者についての遠藤の言及とその典拠資料およびエティエンヌ・ジルソン他『アウグスティヌスとトマス・アクィナス』、山田晶『アウグスティヌス』、同『トマス・アクィナス』、稲垣良典『トマス・アクィナス』等の対比検討を通じて、第六章までに指摘された遠藤文学の展開が、両者に対する遠藤の姿勢と深く関係することが提示されている。

終章では、あらためて各章の論点を概括した上で論旨を補足し、各論の成果を確認する。

以上、本論は、長崎を舞台とした作品を中心に、作品の骨格から細部の表現まで、種々の次元での典拠を多く発掘し、その受容の検討を通じて、個々の作品解釈において客観的で妥当な読解を提示する。また、遠藤の創作活動の根底にあるキリスト教の問題について、資料を通じて新たな照明を当てることで、新たな知見に富んだ遠藤文学の全体像を提示する内容になっている。論証の手続きは資料に語らせる実証的方法を基本としており、発掘された資料とともに、遠藤研究の共有財となることが期待され、明らかに著しい成果として高く評価できる。

以上により、委員全員一致で、十分に博士(学術)の学位に値すると判断した。